

終章

1

ふわ、ふわ、ふわり。

浮かんでる。漂ってる。

強烈な明かりが降り注ぎ、ひどく眩^{まぶ}しい。

明かりを避けて俯^{うつむ}くと、床の上に点々と緑のしみの跡が見えた。

眼をこらすとそれはしみじやなかった。

樹木だ。

小さく見えるけど一本一本がまぎれもなく大きな木で、あちこちに森のような群生を作っている。

遠くでキラリと光ったのは湖か。

湖面に立つさざ波が、その大きさを物語ってる。

どうやらここは空の上らしい。

とても高い空に浮かんでるんだ。

地平線がかすんで見えない。

今さらながら眩しい明かりが太陽だと気づいた。

雲の切れ端が眼の前を通り過ぎた。

ずっと離れた地上に雲の影が落ちてる。

朝なんだな。

照らされてる側の顔が熱くなってきた。

手をかざして陽差しを避けようとした。でもできなかった。手がないのだ。

手だけじゃなく足もない。お腹もない。

何にもない。だから浮いてられるのか。

ふわ、ふわ、ふわり。

今度はこんもり密度の濃そうな雲が寄ってきた。

うまく太陽の反対側に流れてくれたので、じっと見つめていた。

予想どおり、期待に反して、影は落ちなかった。

頭もないわけか。

でも眼は見えるし、空気のおいは感じるし、風だつて頬に当たって……。

はるか下を鳥の群が飛んでいる。こちらと同じ方向に飛んでいるはずの鳥たちが、あつという間に後方に流れていった。

どうやらこの透明な頭は、猛スピードで空を移動してるらしいぞ。比べるものがないので分からないけど、音速に近いんじゃないかな。

前方から灰色の雲が近づいてきた。

ためらう暇もなく灰色の雲の中に突入していた。

びゅんびゅんと風切り音が鳴る。

やがて雲を突き抜けた。

途端に白く冷たいものを浴びた。

雪。少し灰色をしているけど間違いなく雪だ。
もくもくと灰色の煙を出す山が遠くにあった。
地上は薄い灰色の雪で一面に覆われている。
その時このフライトの目的地が分かった。
山陰^{やまかげ}に、寄り添うようにかたまっている一団が見えた
からだ。

2

その一団を目指して徐々に高度を下げていく。
中のひとりが最終目的地だ。そのベージュ色をした頭
に急速接近し、ぶつかるかと思った瞬間、ぼくは光の渦
の中に吸い込まれていた。

いろんな思いが津波のように寄せてくる。
その混乱を突っ切ると、ゆるやかに着地した。
同時に、ぼくは眼を開いた。

猿人たちは寒さをしのぐため、互いの体をぴったりと
くっつけ合っていた。ベージュの毛もブラウンの毛も関
係なく寄り添っているさまは、チョコレート詰合せの中
味が、箱の片側に寄ってしまったのに似ている。

ぼくは手のひらを顔の前にかざした。ベージュの毛に
覆われた手だ。

ああ、戻ってきたんだな。

すぐそばで姉が眠っていた。彼女の膝では幼い弟たちが丸くなっている。その向こうには義理の母がいるし、離れたところにあの大男さんの姿がある。親子三人でひとと抱き合ってる猿人サユリもいる。みんなまだ朝の微睡^{まどろ}みの中にいた。

雪は降りつづいており、太陽は灰色の雲に隠されている。ぼくはブルツと震えた。

するとぼくの動きに呼応するように、目の前に横たわっていた猿人が身じろぎした。それは傷つき、ここまですぐで仲間たちの手で運ばれてきた、我らベージュ族の長、ぼくや姉の父親だった。

彼は薄く眼を開け、二三度まばたきした。

彼の傷は重い。長く生きられないかもしれない。それでも見捨てられることなく、ここまでいっしょだった。

一族の尊敬を浴びている証拠だ。

ぼくは彼の腕に自分の手を置いた。

——タケルか？

その声に驚き、あわてて手を放した。

しかし彼の両眼はぼくをとらえて放さなかった。

まぎれもなくそれは“父さん”の声だった。

ぼくの父、武彦父さんの。

一度引つ込めた手をおずおずと差し出し、彼の腕の肌

の部分にしつかりと触れた。

——タケルなんだな？

「そうだよ……」

ぼくの眼から涙があふれるのが分かった。七ヶ月ぶりに聞く父さんの声は、耳でなく直接頭の中に響いてきた。それにもかかわらず生々しさは本物の声以上だった。

「父さん……また会えるなんて……」

ぼくを見つめる眼が微笑んでいる。

まちがいないく父さんだ。

3

——父さんの願いは聞き届けられたんだな。

ぼくは身を乗り出した。

「願い？ 誰に何をお願いしたの？」

父さんは猿人の体に慣れないためか、何度も深呼吸を繰り返した。それからゆっくりと答えた。

——願いはもちろん、タケルにもう一度会わせてほしいということ。お願いした相手は……“光の河”の話を覚えてるね？

「うん、父さんがアフリカを旅行中、道に迷ったとき、夜空に星がまるで河のようにビュンビュン流れてきて、進む方向を示してくれて助かったお話でしょ？」

——そうだ。

「父さんが村にたどり着いたとき『行い正しき者は光に導かれる』って言い伝えを教えてもらったんだよね」

——へえ、よく覚えてたなあ。

父の眼が細くなった。

——そのとおりだ。村の長老がそう教えてくれたんだ。普通よそ者が“光の河”に出会うことはないのにと、とても驚いてたよ。……じつは、その話にはまだつづきがあつたんだ。

「どんな？」

——長老はこう言ってくれた。父さんはきつと“光”に氣に入られたんだと。“光”は氣に入つた者の願いを聞き届けてくれるんだと。ただしその願いは生涯ただ一度だけ。一度だけならどんな願いでもかなえてくれると。「それじゃどうして父さんの無実を証明してくれるよう、頼まなかったの？」

ぼくは訊ねずにいられなかった。

——うん……父さんは自分が無実だと知ってるし、きつとすぐに疑いは晴れるだろう。でも……。

「待って!!」

ぼくは父さんの話を止めた。違和感を感じたからだ。それはとてつもない違和感だった。

「父さん……父さんは今どこにいるの？」

質問するのが、なぜか怖かった。

——父さんのいるところかい？ 父さんはいま……警察の地下留置場にいる。

ぼくは愕然とした。

父さんがいる時間は、七ヶ月前なのだ!!

——ついさっき、タケルとお祖父ちゃんに面会したばかりじゃないか。

「ち……違うんだよ、父さん……あれはもう去年のことなんだ。今は翌年の七月なんだよ」

——なんだって!?

父さんの眼が飛び出そうなほど見開かれた。

4

「本当だよ、父さんが亡くなって——」

ハッとぼくは口を抑えたが遅かった。父さんはさらに眼を見開いたかと思うと、静かにその眼を閉じ、やがて深くため息をついた。

——やはりそうだったのか……。

ぼくは猿人の顔の下、父さんの表情を読みとろうと食い入るように見つめた。

——面会が終わって留置場に戻されてすぐ、父さんは具合が悪くなったんだ。……以前から仕事が大変だった

から、ここへ来て無理がたたったんだろう。父さんは倒れた。すぐに医務室に運び込まれた。医者は難しい顔をしていた。そのとき父さんは、もう自分の命が長くないことを知った。

父さんは毎日命がけで働いてきた。だから後悔はしてないつもりだ。ただ気がかりは、タケル、おまえと母さんのことだ。

「父さんは仕事がうまくいなくても、*“光”*に助けてほしいとお願いしなかったんだね」

——そりゃそうさ。仕事上の壁で、父さんの力で破れないものはないはずだからね。

「父さんの命を救ってはくれないの？」

——それは無理だ。*“光”*は神様じゃないんだよ。大昔からアフリカの地に宿る、精霊のような存在なんだ。無から有を生み出したり、自然の摂理をねじ曲げたりはできないんだ。それに通りすぎりだったよそ者の父さんを助けてくれたぐらいだから、かなり物好きな性格をしてるね。ははは。

父さんの声が少し明るみを取り戻した。

——でも、七ヶ月を隔てたタケルと父さんを会わせてくれるなんて……時間の流れを操ることはお得意らしい。おまけに待ち合わせの場所が……どうやら大昔のアフリカらしいな。

「父さん、もしかしたらぼくが人類史上はじめて二足歩
行した猿人かも知れない、はじめて道具を使った猿人か
もしれないよ」

父を喜ばせたくて、ぼくはここまでの道のりをかいつ
まんで話した。

——そうだったのか。それは驚きだな、人類の進化に
タケルが一役買ったとは。

「でも精霊は、ただのいたずら心で、ぼくをこの時代に
放り込んだのかもしれないね」

ぼくは照れ隠しに頭を掻いた。

——いや、そうじゃないと思う。

父さんは真顔に戻った。

——あの長老はこうも言ったんだ。精霊は人を試すク
セがあると。最低限のお膳立てはするが、あくまで関わ
る人間ががんばらないと願いはかなわないんだと。タケ
ルは試練を受けたんだよ。

5

「それでもぼくがここまでたどり着けたのは自分の力だ
けじゃないよ。ここにいる仲間たちの助けなしじゃ進め
なかったし、黄金の光に導かれたし……」

——でも、チャンスを逃さず、どう行動するか判断を

下したのはタケル自身なんだよ。タケルの意志なんだよ。
「そうなのかな……。ぼくはうまく操られただけかもしれないよ」

——そんなことはない。精霊に人の心を操ったりする力はない。現に父さんがアフリカで出会った“光の河”に父さんが付いていこうと思わなければ助かっていなかった。実際にあった話だが、遭難して命を落とした人の日記の中に『あの光に従っていれば』と書き残した例があるそうだ。……タケルは自信を持っていいんだよ。

「よかった……」

ぼくは初めて癒された思いがした。

——でもタケルと母さんの両方に会うことは許されなかった……。母さんは元気か？

「うん、一時は倒れたりしたけど、いまはずいぶん良くなった。大丈夫だよ」

——そうか。タケルがいれば安心だ。

「それにね、父さんの無実はちゃんと晴れたよ。新出博士もすつごく助けてくれたし」

——博士か。ははは、懐かしいなあ。

「ぼくたちは“黄金塊”って呼んでるんだけど、父さん覚えてる？　ずっと以前に波多野のおじさんに預けてたんだってね」

ぼくの口からはとても、波多野守が犯人だったなんて

言えない。でも父さんは気づいているのかもしれない。

——そうそう、あれも懐かしいな。あれこそが長老にもらったアフリカ最大のおみやげだったんだよ。父さんの顔に似てるって言われてね。

ぼくはにんまりと笑った。

「父さん、反対側を見てみて」

父さんが不思議そうな顔をしながら首をめぐらすと、そこにモンダイの“黄金塊”があった。

——ああこれだ。父さんの知ってるのより綺麗だなあ。そうか、この時代からあったんだな。

父さんは“黄金塊”を愛おしむように撫でた。

——これが手元になかったので、父さんの願いが精霊に届くかどうか心配だったんだよ……でもちゃんとかないてくれたな。いや、タケルのこの七ヶ月間のがんばりの成果なんだ。ありがとう、タケル……。

父さんの眼に、突然涙があふれた。

6

——タケル、そろそろ……お別れだ。

「父さん!!」

ぼくの眼からも涙が止めどなくあふれた。父さんの眼差しを一瞬たりとも逃さず心の中に焼き付けようと思う

のに、眼の前がゆがんでどうにもならない。言い残したこと、伝え残したことはないだろうか。ぼくは焦った。

「ダム建設は撤回されたから、あの自然は父さんが望んでいたとおり守られるよ。自然保護には博士が協力してくれるから安心してね!!」

——ほう、タケル……なんだか大人になったなあ。見違えるようだよ。……そういえばタケルとはずいぶん長く遊んでやれなかった。すまん。

「そんなことはいって!! ぼくね、これから父さんにならって旅行してみようと思うんだ。将来はバイクツーリングもいいな。それで父さんの行った国めぐりをしてみるよ。博士は来年アフリカに……ここへ来るらしいから、ぼくも訪ねるよ。それから、それから……」

もう限界だ。涙で声が詰まってしゃべれない。

ぼくは父さんの胸に突っ伏した。父さんはぼくの背中をやさしく撫でてくれた。

——大丈夫だ。父さんは心配してないから。

父さんは両手でぼくを抱き起こした。

——猿人の形で再会できたのは何かの縁だろう。もしかするとこの猿人たちはタケルや父さんの先祖かもしれない。そんな気がする。DNAが呼び寄せたんだと……。父さんのDNAもタケルの中に残る。だから、きつと、タケルも、旅が、好きに、なる、と、思う。

「父さん!!」

——おわ、か、れ、だ。元気、で、な。母、さんを、頼ん、だ、ぞ。

父さんの眼の中からスーツと光が消えていくのが分かった。

やがて眼は閉じられた。父さんは去ったのだ。

ぼくはしばらく猿人の父を見つめていた。

猿人の父はすうすうと寝息を立てている。

雪はしんと降りつついてる。

ぼくは空に向かって、アフリカの精霊さんありがとうとお礼を言った。また父さんと話ができるなんて思ってもいませんでした。

人類発祥の地、*“溝の帯”*のあるここはきつととても温かい場所なのでしょう。この場所から世界を見つめ直すのも大事なことも知れません。

精霊さん、またいつか*“光の河”*流れ着く場所で会いましょう。

さようなら……。

7

雪はやんだ。

仲間たちは起き出し、旅立ちの準備を始めた。

と言っても荷物なんかない。裸一貫だ。

タケルは去っていった。

ボクの体は再びボクだけのものになった。

精霊に頼まれて、タケルに貸していたこの体。

タケルには時々アドバイスを送ったりしたけど、君はボクの存在に気づいてなかったようだね。

タケルは未来の人間だという。ボクには正確に理解できなかった。それでも君の活躍には目を見張った。君のおかげでボクたち一族は救われたし、敵の一族まで助けてしまったんだから大したものだ。常に君の後ろにいて、いろんなことを学ばせてもらったよ。ありがとう。

眼の前に置かれた“黄金塊”。

タケルが住んでいた土地の形に似てるらしいね。でもボクの眼には違って見えたよ。何だと思う？君の記憶の隅に残っていた世界地図、その中で君がアフリカと呼んでいた大地の形さ。ちよつと斜めにすればそっくりなんだよ。

もう君に会うことはないんだね。さみしいな。

ボクはいずれリーダーになる。そのとき君から学んだことを元に、みんなを幸せにしたい。

君が猿人サユリと呼んだ男は、同じ毛色をした仲間たちと、昔いた南の土地に行くと行って去っていった。彼らとはまた会えるだろうか……。

ボクたちは北に進む。ボクの頭に残る君の記憶によれば、北のほうに木の実のなる樹木がいっぱいあるらしいね。そこに行ってみるつもりだ。

姉もいる。君が“大男さん”と呼んだ頼れる右腕もいる。家族もいる。傷ついた父を支えてみんなでがんばるよ。

ああ……。

少しずつ頭の中から君の言葉が消えていくよ。

ボクの頭脳は君のものほど働かないんだ。

やがて君の顔も忘れてしまっただろう。

でも君の与えてくれた知恵は忘れない。

二足歩行、もっと練習してうまくなるよ。

仲間たちにも特訓させてね。

“黄金塊”も忘れず持って行くから。

……雲が切れた。

いい天気になりそうだ。

さあ。

新天地に、一步を踏み出そう。

きっかけの一步 完